

遺稿

実践 ロングスモーキング

へ渡辺純夫氏の理論と実技へ



■はじめに

平成六年四月に亡くなられた渡辺純夫氏は、六本木ローテシアンパイプクラブの名譽顧問として、長年にわたりクラブ活動に貢献されていきました。特にロングスモーキングの技術指導には熱心で、同クラブが全日本大会でたびたび団体優勝を重ねてこられたのも、その陰に氏の大きな力がありました。また氏自身もヨーロッパ大会（アムステルダム）で151分13秒を出して優勝されたのをはじめ、国内外の大会でもよく優勝されて、ベテランの実力を発揮されていきました。

ロングスモーキングは、パイプたばこを楽しむことの手なヨーロッパの人たちが考えだした遊びで（51・52・53号「スモーカーたちのコンテスト」参照）、パイプ愛好家たちが一定の規則の下で、3gのたばこをいかに長く喫い続けるかを競うもの

なのですが、コンテストでなくとも、暇があれば、独りで挑戦してみるのもまた楽しいものです。

コンテスト記録が常に上位にいる人たちは、それぞれ工夫をこらし、辛抱強く試行を重ねて、たばこの詰め方、火のつけ方、タンパーの使い方から、さらに呼吸の調整まで、十人十色、独自のやり方を会得されております。

それだけに秘技の域まで達している人もおり、その奥義は容易に洩らされないものです。氏は国内をはじめ、たびたび渡欧してコンテストに出場、有名選手のたばこのほぐし方からフィニッシュの喫い方まで、つぶさに眺め、これらも参考にあれこれ試みながら、独自のテクニックを開発されました。

氏は生前、クラブメンバーにも経験談をまじえ、その技術を公開されていましたが、本誌ではここに渡辺

理論と実技を披露し、広く参考にするものです。

なお原文処理にあたり文章、図示の難解部分があり、これらは解説の上、原文を尊重の上、添削調整を施しました。ご諒承ください。

1、たばこのほぐし方

配布される競技用たばこは、規定3gを厳重に計量され、許容量は上限3.1g、下限2.9gとなっています。

たばこの乾湿により同じ3gでも量に多少がありますが、コンテストに供されるたばこは比較的製造月日の新しいものが多く、充分な湿り気を持つているのが通常です。

またたばこの刻み方もミックスチャータイプ、キャベンディッシュタイプなどと多様ですが、好き嫌いで気にする人は別として、一般的にはそんなに頓着することはありません。配布されたたばこをそのまま大雑把にパイプに詰める人もいますが、やはりいったん紙上に広げてよく点検してほぐすべきです。

特に爪楊枝状の中骨（たばこ葉の中心を走る葉脈）が混じっている場合は、爪で細断する必要があるようです。他に目立つほど大きなものも、細かくしておきます。

これらを両手の掌でよく摺りあわせてもみほぐします。余り細かくなり過ぎると火の周りが早くなることもあり、たばこが乾燥気味の場合はまとめ方に注意してください。またたばこが湿り気味の時はよくほぐれないことがあるので、目立つような大きな葉っぱは、爪先で干切るとよいでしょう。

世界記録保持者だったウェッチ選手（イタリー）がたばこを非常に丁寧にもみほぐし、たばこ詰めの時間5分間のうち、4分間程もこれに費やしていたのが印象的でした。

2、たばこの詰め方

競技用タンパーの径が以前の10ミリから15ミリに改訂され、太くなっただけ、ボウル内の操作も不自由になりました。これにより当然たばこの詰め方も対応が変わってきます。

配布されたたばこを無造作にボウルへ突っ込むように詰める人もいますが（記録保持者の中にも）、やはり何回かに分けて慎重に積めた方がよいでしょう。

ほぐし終えたたばこは、三分割なり四分割に目分量で分けます。

それでは三分割と四分割とどちらがよいのでしょうか。これは一概に、

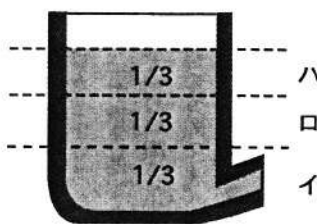
いえません。記録保持者の方々でもその時に応じて三分割にしたり、四分割にしたりして色々です。さらに分割されたたばこそれぞれを固く、あるいは柔らかく、それもたばこの湿度も考えながらまとめますが、それには度重ねて経験する以外に方法がなく、熟練を要します。またたばこを大雑把に二分割で済ませたり、まったく分けないで恣意にボウルへ詰め込む人もいて、中にはよい記録を出している人もいます。もちろんその後火のつけ方、タンパーの使い方、喫い方に独特の技術を持つておられる人ですが、こうなってくるとロングスモーキングは、ほぐす、詰める、喫う、押さえるという複合的な能力のいる競技といえましょう。

一、三分割が基本

3gのたばこを、およそ1gづつ三分分します。

イ、一回目は1/3を丸く固めてボウルの底に入れ、指先で底に擦りつけるようにして押さえ、続いてタンパーで偏りなく押さえ直します。余り強く押さえ固くしますと、喫煙中タンパーで上から押し続けますので、底部には自然に圧力が加わり身動きできないほど固くなります。

〈図1〉基本は三分割

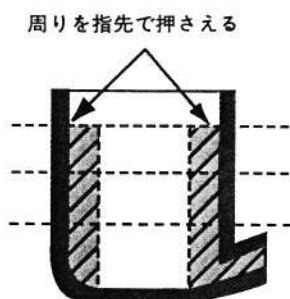


で注意してください。さらに注意すべきは、たばこの丸め方で、湿り気味の場合はやや軽く、渴き気味の場合はやや強く固めるのがコツです。

ロ、二回目の1/3も一回目同様固く丸め、タンパーで押さえますが指先でボウルの内壁に接しているたばこ部分を、内壁に沿って指先でぐるりと一巡二巡軽く押さえ回ります。さらにタンパーで軽く押さえおきます。

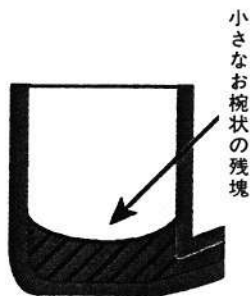
ハ、三回目の1/3も固く丸めますが心持ち柔らかく目にするか、あるいは1/3のうちほんの少しを残して置き、三回目を詰め終ってから、最後にこれを表面着火位置に散らし軽く押さえおく方法もあります。固く詰め過ぎたようで心配な方はこのやり方もよいでしょう。最後に二

〈図2〉外側は固く



回目よりも強目に、ボウル内壁に接している部分のたばこを指先で押さえ、最後にタンパーで押さえ上げて仕上げます。

〈図3〉上手な喫い終わり



ボウル内壁に接しているたばこをよく押さえおくことにより、詰められたたばこの外側は固く、中心部は柔らかくなっていますので、喫い易く、また、火を長持ちさせる結果となります。ただしタンパーを上手に使って燃え方をよく見ていないと、中心部だけが燃え下がり、筒状にすっぽ抜けて、火が消えてしまう

ここで参考までに小生が一九八一年（昭和五十六年）頃、130分位の好記録を出していた時の詰め方を紹介しておきます。

A たばこが乾き気味の場合

イ、もみほぐしたたばこの中で比較的荒目のものを、強く丸めて詰め、タンパーを回しながら軽目に押さえる。

ロ、二回目は柔らかく丸めた程度の固さのものを詰め、これは少し強目にタンパーを回しながら押さえる。

ハ、残った細かいたばこを少し残して強く丸めて、タンパーを回しながら強く押さえる。

ニ、残しておいた少しのたばこを詰め、軽くタンパーで押さえる。

B たばこが湿り気味の場合

イ、たばこは柔らかく目に丸めて詰め、比較的強く押えて周辺は先述と同じく、さらに指先で押さえる。タンパーを回しながら押さえる。

ことがあります。最後まで喫いきれず途中で火が消えてしまった時、灰やたばこが小さなお椀状の塊となつてころりと落ちるのが長持ちする上手な喫い方で、ばらばらに落ちるのは長持ちしない喫い方です。

ロ、たばこはイよりやや強目に丸めて詰め、後はイと同じ。

ハ、やはり少し強目に丸めて詰め、イと同じように押さえ、最後に少し残して置いたたばこを詰め、軽く押さえて仕上げる。

以上ABはともに三分割法ですが、これに少しアレンジを加えた方法を考え、競技にもよく使いました。

イ、もみほぐしたたばこの中から荒目のものを選び出し、まず1/3を一回目として強目に丸めて詰めます。後はAのイと同じ処置をします。

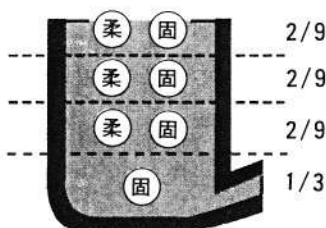
ロ、残り2/3をさらに1/3に分け、その1/3をさらに1/2ずつに小分けします。(1/3×1/2)この1/2ずつを固目、柔らかか目に丸めて二種の丸め玉を計三個ずつ作ります。二回目はまず柔らかい玉をボウルの前部に詰め、固い玉はボウル手前に詰めます。そして指先とタンパーを使い程よく押さえます。三回目も二回目基準に準じます。四回目も同様とし、最後に柔らかか目のものを最上段前方に詰めます。

もちろん、たばこの丸め方の強弱、押さえ方の強弱などはたばこ

の乾き具合、湿り具合をみてAB各項に準じます。

またボウル内の喫い口に繁がる穴は、底部の手前にあり、呼吸の出入りに近く、その部分のたばこは当然早く燃えます。故にボウル前方には柔らかか目のもの、手前には固目のものを詰める訳です。

〈図4〉押さえ方の強弱



二、四分割ほか

たばこは三分割を基本としますが、さらに小まめに細分化して研究するの面白いものです。

あれこれやってみて結果のよかったものを選び、ここに図示しますので参考にしてください。

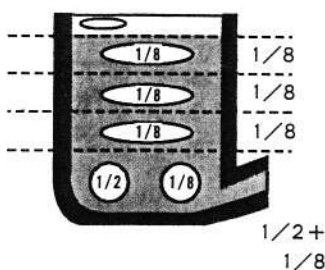
A 1/2+1/4分割パターン

大胆にまずたばこの1/2を少し柔らかくまとめ、残り1/2のたばこをさらに四等分して、それぞれをやや固くまとめて順次詰めて、指先

とタンパーで押さえてゆきます。もちろんボウル内壁周辺は押さえて固くします。最後に少し残して置いたたばこを詰め、押さえます。

〈図5〉

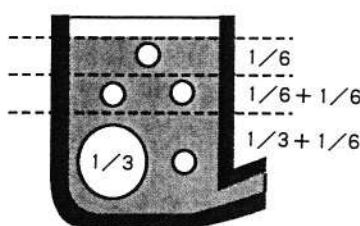
少し残しておいたもの



B 1/3+1/6分割パターン

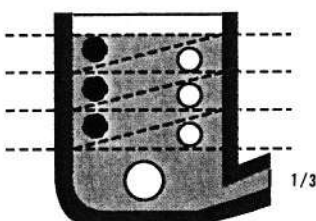
まず1/3を少し柔らかくまとめボウルに詰め、残り2/3を四等分して(1/6)やや固くまとめ、その一つを下段に追加して詰め、中段には二つを別々に詰めます。上段に最後の一つを詰め、最後はやはりボウル内壁周辺を強く押さえておきます。

〈図6〉



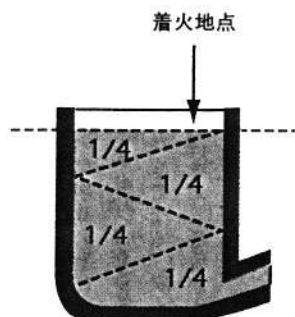
〈図7〉

○は固く、●は柔らかく丸めたもの

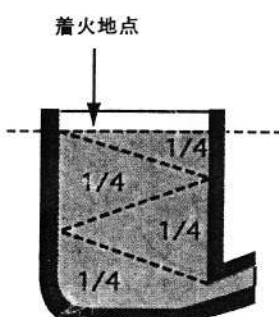


C 1/3+固・柔パターン
まず1/3を少し柔らかくまとめボウルに詰め、残り2/3を三等分しますが、その一つ一つについて固くするものに2/3、柔らかくするものに1/3を使い、それぞれ大小三個ずつ作り、一段ごとに固いものと柔らかいもの二種を図のように交互に詰めてゆきます。技術的にむずかしいのですが、固い方を詰めた時に指先を使い、完全でなくても傾斜をつけるように押さえつけます。そしてその傾斜面に沿って柔らかい方を詰めてタンパーで平均に押さえます。これもボウル内壁周辺は固く押えておきます。また柔らかいものはボウル前方に、固いものは手前になる構図は先述した理由に拠っております。

〈図8-2〉



〈図8-1〉



注

またこんな面倒なことをせず、たばこ3gを四等分し、最初に詰めるたばこは少し柔らかくする他、残り三回はいずれも固目にし、次の図のように傾斜詰めを単純にします。また傾斜順序を逆にしてみたりしています。が、これでも好記録が出せます。

3、火のつけ方

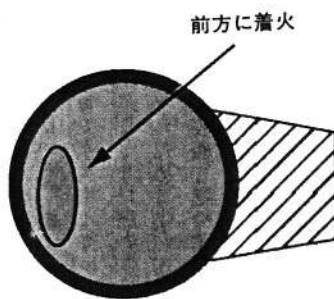
たばこを詰めながら、また詰め終わった後、火をつける前に必ず空喫い、空吹きをして通気を確かめてください。使用マッチは二本、時間は一時間に制限されていますが、火付きの具合をみて一本で済むこともあり、また最初の一本でまず火をつけ、あらかた着火状況をみて、タンパーで押さえていったん火を消し、焦げたたばこに二本目のマッチで再び火をつけ、火を密着させる方法もあります。

マッチの火を広く全体につけ喫い続ければ安定はしますが、たばこの消耗も早く、長くて70〜80分位で喫い切るだろうと思います。火の面積が小さいほど、たばこの消耗は少なくて済み、一点着火といってマッチの頭ぐらいの火を理想としますが、この火種を次々と転がすのは至難の技で、成功率は非常に低いようです。

一般的にはたばこ表面の1/3から1/2、理想的には1/4位に火をつけるとよいでしょう。余分なところに火がつかないようにタンパーを横にしてボウルトップに乗せ、これを覆い、隙間から火をつける人もいます。

また前述の通り、火は喫い口に近いかたばこの燃えを早くします。で、着火は喫い口に離れているボウル前方にします。ただし片燃えになる恐れがありますので、注意してください。

〈図9〉 着火位置



4、喫い方とタンパーの使い方

ロングスモーキングの喫い方は、日常パイプの味わいを楽しむ喫い方とはまったく異なっています。パイプ歴の長い人ほど、知らず知らずの間に、喫い方が段々と強くなっています。

このように、たばこを味わいながら喫い続けられるのは、3gのたばこならせいぜい30から40分ほどですが、これだと火も消えないで、たばこもうまいはず。この調子ではロングの記録を競うコンテストには不向きです。このことからいえば、むしろロングスモーキングのトレー

ニングを始めたばかりの初心者の方が適しているようです(クラブのコンテスト例会でよくあることです)。何カ月か、何年かパイプを喫っている人なら、火を消さないようにちよつと注意して喫えば、60から70分程は喫えるはずですが、それ以上喫うのには、目標にはば五段階の順序があるかと思っています。

A 60〜70分

火を消さないで30〜40分喫える人は、日頃の味わう喫煙を忘れ、ロングを意識して慎重にスタートしてください。着火の際は少し強目にゆっくりと喫い込みますが、続けざまに二回、三回と喫い込むと、表面のたばこは火熱でカールして縮み上がって、火は立ちどころに消えてしまいます。

着火終了後は必ずタンパーで軽く押さえて火を落ちつかせることが大切です。

その後、5分10分と経つ間、火の燃え具合をちよいちよい眺め、30分の頃からタンパーをねじるように回しながら軽く押さえてゆく操作がスムーズならば、よくいわれる40分の壁を越え、まず60〜70分ラインに到達は可能でしょう。喫い加減はゆるく一度喫い、二、三度静かに吹く

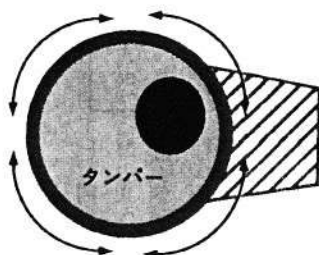
リズムでよいでしょう。

30～40分前後で火が消え易いのは、灰が除々に溜って周りの葉に火が移らないからであり、ただタンパーで押さえるばかりでなく、タンパーを回しながら押さえる必要があります。

また火種の燃え具合を見ながら、火種の消えてしまう前にタンパーの角を使い、周辺の未だ燃えてない葉を火種に乗せかけて、タンパーで押さえます。また火種が片寄っている場合は、タンパーで中心に寄せるよう、ゆっくり移動させねばなりません。

〈図10〉

タンパーの使い方



B 80～90分

火種が燃えず中心にあるように、ボウルを覗いては周辺の葉を少しずつ火種に被せかけます。また火が次々と下部に燃え移っていると、順調に喫えているようで安心しがちですが、筒状に燃え下がってしまい底

に達して消えてしまいます。たくさん

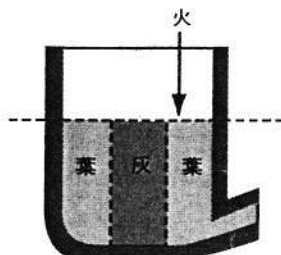
の灰が火種を覆っていますと、灰の下がわからず火種の所在もわかりませんので火種の確認が必要です。

ボウルを横にして火種を落とさないように静かに灰を出す人もいます。これは熟練を要します。

ボウルが熱くなると喫い過ぎ、ほんのり暖かいと順調と判断されますが、中心を筒状に燃え下がっていますと、ボウルは熱くならず高温状況が続く、周囲に葉を残したまますっぽ抜けて火は消えますので、注意がいらいます。

〈図11〉

中央だけ燃える



C 100～110分

いよいよ100分の大台を狙うとなると、以上A Bを忠実に実行するだけでは無理のようです。

まず最初の30分は如何に火種の安定を図るかのほかに、如何にたばこの消耗を少なくするかが重点になります。燃えの安定を心配する余り、

つい喫い過ぎて火勢が広がるとボウルが熱くなります。こんな場合、喫う回数より吹く回数をうんと増やしますと、いくらか鎮静化することもあり、以後うまくゆけば喫い続けられはしますが、一度これに陥ると如何に努力しても、もはや最高Cの記録には届きません。なぜならたばこの50%は消費していると思われるからです。

喫い方は、喫うのが20～30%、吹くのが70～80%位のペースで終始するのがよいようです。

日常パイプどころかシガレットさえ喫わない女性が、90%以上を吹くだけで100分位火を保ち続けられるいくつかの実績を見ても、吹くのも技術があり、ロングスモーキングの重要な操作であることがわかります。火を消さないために喫い、火をもぐらせないで表面で燃やすために吹くのです。

片寄った燃えを移す場合、例えば左から右へ移す時は、パイプを右へ向け、タンパーで右側を押さえた後、パイプを上に向け静かに吹き続けると移動します。

また火種が表にぼつりとまとまっている時は、タンパーの角で少ししやくるようにして移す。

D 120～130分

大台を越え、いよいよ記録に挑戦の本番を迎えますが、この頃になるとタンパーの使い方が命です。

たばこはボウルの底に近づき深いところで燃えますので、タンパーを前後左右、意のままに駆使できません。タンパーの径が10ミリから15ミリへ競技規定が改訂され、太くなった分、狭いボウル内でタンパー先端を使つての細工にも以前のように小回りが利かなくなり、操作に限界があり、その分、最初のたばこ詰めの方法を工夫する比重を高くしなければなりません（先述「たばこの詰め方」参照）。

E 140分以上

ここまでくると配布されたたばこの種類、乾湿度などの見極めから慎重にかからねばなりません。それによつてはぐし方、詰め方もよく考えて、経験を生かした工夫をこらさねばなりません。

C、Dの時より全般に少し固く詰めた方がよいようで、それだけタンパーの使用回数も多くなります。さらに灰は火を消しますので、灰の処理も重要です。灰に埋まっている火種と未だ燃えてない葉の存在位置を

よく眺めて、その火の移りを眺めている必要があります。

喫い方は、喫う50%、吹く50%位を維持していればよいでしょう。パイプはくわえたままで、口を開かず鼻で呼吸するほか、ボウル内の燃え具合を眺めて喫わないでいる時間を如何に長くするか、消えかかる前にタイミングよく喫い直すことが出来るかどうか、きわどい離れ業で熟練を要します。



パイプスモーキングコンテスト・セット

5、補足

第十一回全日本大会（仙台）で高岡豊氏（鹿児島）が179分11秒の大記録を出されましたが、その様子を見ておきますと、二つの注目すべき点がありました。一つはたばこの詰め方で、当日は三回詰めの方でした

が、最後の三回目はボウルトップの線ぎりぎり、ちよつと盛り上がり気味の詰め方で、非常に柔かく詰めておられるようでした。小生の場合

はボウルのほぼ2/3位、ちよつときつ目の詰め方でしたが、試しに彼の詰め方を真似して何回か挑戦しましたところ、四、五回に一回は130、150分前後を記録、調子のよくない時でも120分位の記録になりました。

もう一つはフィニッシュに近づくとつれ、しきりにボウルを覗いては灰を灰皿に出しておられました。もちろん余分な灰は邪魔になり取り除いておられますが、下手すると火種も失ってしまう極めて危険な操作で、これは真似できませんでした。

このように機会があれば強豪選手の技術をよく眺めて取り入れて、あれこれ試して自分流のものを築き上げる平素の努力が必要です。

なんとかして大会で150分の記録を出してみたいものだ、あれこれ探りながら、月に三〇、四〇回も練習を続けたこともありました。

たばこのほぐし方から始まり、詰め方、着火の方法、喫い方、タンパーの使い方などを詳述してきましたが、臨戦的に一番大切な時間は、着火から30、60分の間で勝負は決ま

るということを肝に銘じておくことです。

3gのたばこを1/3ずつほぼ均等に詰めた場合、火を消さないようにとの意識が強いと喫い過ぎて最初の1/3を20分位で喫ってしまったことと、1gを消費してしまったことになり、やれやれ燃えは安定したとゆつくり喫い始めても、もう間に合いません。最初の1/3は特に慎重に取り組み、50、60分位で1gを消費できれば、残り2gは極めて有効消費できますので、ほぼ入賞可能の記録は出せるでしょう。従ってこの神経集中の第一段階はおしやべりはもちろん、他に気を取られるようなことは一切許されないと心得てください。

以上、多岐にわたり、いろいろ述べてきましたが、説明不足や誤りもあると思います。また、もつともつと高度な技術を持っておられる方もたくさんいらっしゃいますが、小生も今後さらに経験を積み、研鑽を重ねて新しい記録に挑戦したいと希っています。

（おわり）

協力―六本木ローデシアン

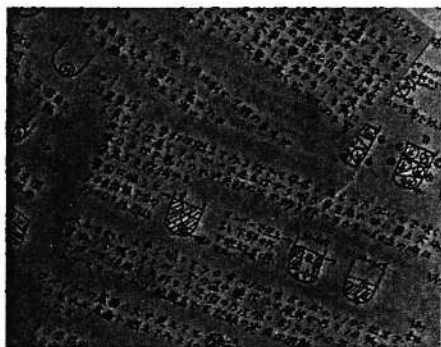
パイプクラブ

■あとがき

このロングスモーキング解説は渡辺純夫氏が昭和五十九年から六十二年にかけてお書きになったものです。記録保持者のベテランはたくさんいますが、こんなに多岐にわたり、懇切なお話に接するのは初めてであり、ご高齢にかかわらずその研究熱心なご姿勢に敬意を表します。

パイプ愛好家にとって大変参考になる貴重なお話なので、広く読んでいただくとうと掲載に及びました。

日頃親しい間柄でもありませんのでパイプについての会話も随分いたしました。それらを思い出し、文中に織りませながら編集しました。ご参考になれば幸いです。



びっしりと書き込まれた生原稿